



職業人講話 井上信平さん、大間に来たる

11月12日(火)5・6校時、全生徒教職員を対象に職業人講話を実施しました。講師は株式会社0172 代表取締役の井上 信平 (いのうえ しんぺい)様でした。

井上信平様 プロフィール

- ・1974年生 出身：兵庫県 兵庫県立龍野高等学校卒業とともにアメリカの大学へ留学、グラフィックデザイン科を卒業した。
- ・27才のとき青森の文化に興味を持ち、弘前へ移住した。
- ・株式会社0172でデザイン業務を行う傍ら、弘前市役所隣と平川市八幡崎地区にハンバーガー専門店「デュボワ」を出店した。その他、岩木山の絵を描くこともライフワークとしている。
- ・「デュボワ」では、女性が輝ける職場づくりのため、子育てで忙しい母親を積極的に採用し、従業員の生活を大切に考え、昼のみにしている。

井上様は中学時代から「interesting」な人生を歩むというこだわりを持ち、人がやっていないことをやり続けてきたそうです。「クラスの隣の席の人とは違う人間になろう」「代わりがないから生き残っていける」など、集団から突き抜けることの価値を説いていただきました。

全国的に仕事をすぐ辞めてしまう若者が多いことが話題になっていますが、井上さんは留学先のアメリカに着き、不安でたまらずホームシックに陥った際、「ここで家に帰ったらアメリカに来た意味がない」と思い、帰りたい気持ちを我慢したそうです。実家や故郷という居心地のよい場所を飛び出して、自分の人生を切り拓くことの尊さがひしひしと伝わるエピソードでした。

講演のあとには多くの生徒が手を挙げて井上様に質問しました。井上様がその都度一人一人に親身になって答えてくださったおかげで、今後の進路や青森県の魅力について考えを深めることができたのではないのでしょうか。

講話後の生徒の感想

- ・ 挑戦することの大切さと、人の為に生きることの素晴らしさを知りました。私は挑戦する前に逃げてしまったり、そもそも挑戦を恐れてやらないことなど結構あります。また、自分の為にしてくれる人に文句を言ってしまうこともあります。今後は、自分中心の世界ではなく、社会のため、人の為に何か出来ることはないか考えて行動したいと思いました。何事もまずは挑戦してみようと思います。(2年女子)
- ・ 井上さんの講演を聞いて、与えられる、何かしてもらおうという概念をなくして、人のために役に立てることをしたいと思いました。初めてのことをする時は躊躇してしまうことも多々あるが、積極的に行動してみたいと思いました。(3年女子)



進路指導部スタッフから ~その①~

此方から彼方へ、彼方から此方へ...

文責: 藤井佑太

タイトルにある「此方」と「彼方」ですが、日常生活ではあまり使うことないですよ。私自身もあまり使うわけではないのですが、ちょっとばかりかっつけてみました(笑)。「此方」は自分自身を、「彼方」は相手を意味しています。ですので「私からみなさんへ、みなさんから私へ」という意味で捉えてください。

私は高校時代野球部に所属し、大学には「野球特待」で入学しました。大学ではレベルの高さに圧倒される日々でした。そこで感じたのは「環境が人を変える」ということです。同じ高校3年間という時間をどのように過ごしてきたかでその後に大きく影響することを学びました。この日からもっと学び、将来に生かしたいという欲が芽生えました。しかし現実はその上手くはいかず、チーム事情から「マネージャーになってほしい」と告げられました。いわゆる「もう試合にでることはない」という通告でした。理由はこれだけではありませんが、これを機に部を退部しました。そこからは遊びやバイトに時間を費やし、人生の経路が逸れかけていました。その時私を救ってくださったのが高校時代の担任の先生でした。高校を卒業したにも関わらず本気で叱ってくださり、もう一度将来の夢を考えるきっかけを与えてくださいました。また大学の友人にも声を掛けてもらい、もう一度野球をすることもできました。今の私がいるのはこの出来事があったからだと思います。

しかし、良い事ばかりではないのが人生。私は部を退部したと同時に「逃げ癖」もついたような気がします。これは今でも治っていません。皆さんのなかにもすでに退部・転部してしまった人、中学までやっていたけど今は何もしない人もいます。そういう人はもしかしたらすでに「逃げ癖」の持ち主かもしれません。最後までやりきる前に先に逃げ道を探していませんか？心当たりがある人は今からでも間に合います。すぐ何か一生懸命になれるものを見つけ行動しましょう。今現在部活動に所属している人は最後まで辞めずに続けてください。その頑張りが一生涯の財産になります。一生懸命に取り組むみなさんの力になるよう全力でサポートします。その皆さんの頑張りが私の活力となります。「此方から、彼方へ、彼方の喜びが此方の喜びとなる」機会を楽しみにしています。